

号があるとよい。高圧送電線はよい目標となるので、これも記入されているとよい。この地図は本来は人工衛星を利用して現在位置を知る、Global Positioning System (GPS) の受信機である PYYIS (ソニー社) の販促用斡旋品であるが、別売もするとのことである。希望者は徳間書店ではなく、(株)ホウ・コーポレーション (渋谷区本町 1-4-3 エバークレース本町 1-C 電話 03-5388-7601) に問い合わせられたい。なお GPS によるナビゲーションシステムは、陸上海上を問わず既に実用化され、車内の画面に地図を表示して現在位置を示すことができるばかりでなく、これから行く先の案内までできるそうである。ポータブル受信機は14~15万円とまだ少々高価だが、弁当箱(女性用)程度に小型化されており、操作はごく簡単なので、野外調査に使ってももて余すことはない。とくに海外調査では威力を発揮するだろう。位置決めはきわめて正確で、秒以下(距離にして30~100m)の精度を持っている。ただし衛星三個を捕捉する必要があるので、谷間や林下では役に立たないことがある。(金井 弘夫)

□大場秀章：誰がために花は咲く 220 pp. 1991. 光文社カッパサイエンス. ¥790.

講義をかみ砕いた短編集というところ。生物の発生から高等植物の適応戦略まで、堅苦しい理屈を著者の文才で適当にとぼしたりほぐしたりしながら物語る。トピックスは21あるが「カサノリの異常ながんばり」、「わが道をゆくコケ」、「ユキノシタのちゃっかり保険」、「手ごわいイチゴ」などという見出しをみれば、雰囲気は察せられるだろう。近頃の大学生は分子レベルの生物学は習ってくるけれど、形態や分類については高校や中学でも何も仕込んでくれないので、こういう本を読んでもらうことは有益と思う。学術用語がたくさん入っているので、一般向けにはかなり基礎知識がないと読みづらいのではないかとちょっと思い切っ

さしくして、中高生向けの物語りに翻案したならば、身近な植物で実習できる話しもあるので、学校の副読本として使われたり、生徒を分類や形態へ関心をもたせるさそい水になるのではないかと思う。なお「イチゴは多花果」と書かれているが、この和文用語は文字面からでは誤解をまねきやすく、「集合果」の方が無難と思う。岩波生物学辞典(1960)では「2個以上の花から由来した果実の集合体があたかも1個の果実のように見える器官の総称」とあり、例としてモクレン、イチジク、クワ、キイチゴがあげられ、図としてはイチゴが描かれている。このうちモクレン、キイチゴ、イチゴは1個の花に由来するものだから、文頭の定義からすると誤りとなる。同書ではこの用語の原語として syncarp, polyanthocarpium, multiple fruit が挙げられており、「2個以上の花から由来した」というくだりがこの三つのどれにもあてはまるのか疑問である。したがって「多花果」という用語を、この三原語にあてはめてよいものか、再考を要する。最新植物用語辞典(広川書店1965年)では多花果→集合果で、multiple fruit に当てられているが、説明は「穂状花序の密集した各花の子房が成熟して、全体があたかも一個の果実のようにみえるもの。例クワ」とあり、「穂状花序の」というところが引っかかる。学術用語集植物学編(増訂版)では多花果は polyanthocarp に当てられているが、説明はないので追求のしようがない。学術用語集の目的は、一つの原語に対して一つの和文用語を選定することが最大の目的だが、これは原語の方の定義が厳密に決まっていることを前提としなければ成り立たない。原語の方にもいろいろな解釈があるのに、そんなに単純に割り切れるものか、前々から疑問に思っていた。明治時代の欧語崇拜の思想の尻尾が、いまだに尾を引いている感じがする。

(金井 弘夫)